
子どもや障害児のための演奏会から

音楽教育へとつなげる

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

子どもや障害児のための演奏会を鑑賞し、プログラムや司会、作品へのアプローチ法や指導の内容について比較を行う。プロの音楽家がどのように子どもたちへ音楽を教え伝えようとしているのかについて明らかにしていく。

そして、実際に演奏会を行った団体へインタビューを行い、演奏者の視点から子どもや障害児への工夫を伺いまとめる。様々な作品へのアプローチ法や指導の内容についての論文を読み、様々な演奏会の形式があることを調査する。

2. 代表者および構成員

・代表者

鈴木淳之介 音楽領域専攻 3回生

・構成員

杉本瑞樹 音楽領域専攻 2回)

布上大雅 音楽領域専攻 3回)

梅原 瞭 音楽領域専攻 3回)

小嶋泰地 音楽領域専攻 3回)

中谷優友 音楽領域専攻 2回)

川北春優人 音楽領域専攻 1回)

3. 助言教員

(田邊織恵 音楽領域)

第2章 内容や実施経過など

1. 子どものための演奏会の鑑賞

(1) 京都市交響楽団「オーケストラ・ディスカバリー2023 『みんな集まれ、オーケストラ!』」

この演奏会は、子どものために企画された、ある一人の作曲家に焦点を当てながら曲を演奏するものである。今回はこの演奏会を鑑賞し、子どもに伝え

る上でどのような工夫が行われているかを確認する。また実際に鑑賞できたのは「第1回 J.S.バッハ・アンド・ヒズ・タイム」のみであり、満席などで鑑賞できなかった「第2回 ベートーヴェン」「第3回 チャイコフスキー」のプログラムからも、考察したい。

(2) パノラマとラボラトリー「京都教育大学附属特別支援学校 音楽演奏会」

この演奏会は e-project 他団体が京都教育大学附属特別支援学校と実施し、コラボレーション企画としてポップスバンドの「パノラマとラボラトリー」と演奏会を開催した。それを障害児のための演奏会の鑑賞とし、報告する。

○「パノラマとラボラトリー」について

「パノラマとラボラトリー」は、欧州で活躍していた大分出身の気鋭のドラマー・坪井洋さんが呼びかけ結成したポップスバンドである。

ジャズ・ポップス・エレクトロニカを横断するキーボード・森田珠美さんと作り出す音空間は世界一のインディーズバンドを決める大会「エマージェンザ」では日本一となり、ドイツで行われた世界大会では2位タイと J-POP が世界に通用することをしめた。

新たに迎えたシンガーソングライター・aya さんの高い歌唱力に裏付けされたストレートに心に響く歌声と合わさり、新たなオルタナティブポップの世界を生み出されている。

(パノラマとラボラトリーのHPから引用)

2. 「パノラマとラボラトリー」へのインタビュー調査

(1) インタビューの経緯

京都教育大学附属特別支援学校の先生から、教育の場で子どもに演奏活動をしているグループがあると聞き、他団体 e-project 「どれみふぁそったくん」とコラボすることに決定する。その演奏会の後に、インタビュー形式の講演会を開催し、そのインタビューのまとめを今回の調査とする。

(2) インタビュー内容

場所：京都教育大学演奏室

日時：12/13 (水) 16:00~17:00

司会の鈴木が質問し、パノラマとラボラトリーの

3人に答えていただく。質問は決めているが、その場の回答によって、盛り上がったものやさらに質問ができるものがあれば、それを優先し、質問の前後や飛ばしながら行った。最初にパノラマとラボラトリーの説明を行い、その後45～50分のインタビューをし、最後にメンバーからパノラマとラボラトリーへ、質疑応答をした。

質問内容

1. パノラマとラボラトリーについて紹介をお願いします。
2. パノラマとラボラトリーはどのようにして、結成されたのですか。
3. 普段はどのような活動をされていますか。
4. アウトリーチ活動を、初められたきっかけはなんですか。
5. 子どもを対象にしたアウトリーチをなさるのはなぜですか。
6. 子どもを対象にした演奏会で気をつけていることを教えてください。
7. 子どもを対象にした演奏会で、大変だったことや良かったことを教えてください。
8. 障害児を対象にアウトリーチ活動をしているのはなぜですか。
9. これからの目標などはありますか。
10. よろしければ、教育大生にメッセージを伝えてください。
11. 質疑応答

第3章 結果や成果など

1. 子どものための演奏会を鑑賞して気づいた点
(1) 京都市交響楽団「オーケストラ・ディスカバリー2023『みんな集まれ、オーケストラ!』第1回 J.S.バッハ・アンド・ヒズ・タイム」の鑑賞から気づいたことを整理すると以下の通りである。

○内容

リュリ：コメディ・バレ「町人貴族」序曲

J.S.バッハ：管弦楽組曲 第4番から「メヌエット」

ラモー：歌劇「みやびなインドの国々」組曲から「メヌエット」

ラモー（坂入健司郎編纂）：歌劇「みやびなインドの国々」組曲から

J.S.バッハ：管弦楽組曲 第3番

J.S.バッハ（レスピーギ編）：3つのコラールから第3曲アンダンテ

J.S.バッハ（ストコフスキー編）：トッカータとフーガ ニ短調 BWV 565

J.S.バッハ（ベリオ編）：「フーガの技法」 BWV 1080 から「コントラプンクトゥス XIX」

J.S.バッハ（ストコフスキー編）：「主よ、人の望みの喜びよ

○気づいたこと

プログラムから整理すると、とても曲が多いことが理解できる。よくあるオーケストラのプログラムは、メインとよばれるプログラムの半分を占める大曲が一曲あり、そして2曲から3曲ほどの小～中規模の曲により構成されている。実際に京都市交響楽団の定期演奏会は、8月・4曲、9月・2曲、10月・4曲であり、今回の演奏会は、9曲とは大きく異なる。さらに組曲もあるため実際に演奏する曲は、更に多い。これは1曲の時間を短くし、曲目を多くすることで飽きさせずに子どもが聴くことができる工夫だろう。また特徴的なのは、後半において J.S.バッハの編曲版を中心にしていることである。オーケストラで演奏する際に、J.S.バッハの作品を大編成に編曲したものや、個性的に編曲したものなどがあり、「編曲」という観点でオーケストラを楽しむことができる。

(2) 第2回 ベートーヴェン、ザ・マスター・オブ・リズム

○内容

ベートーヴェン：交響曲 第1番 ハ長調 作品21 から

ベートーヴェン：交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 「英雄」 から

ベートーヴェン：交響曲 第5番 ハ短調 作品67 「運命」 から

ベートーヴェン：交響曲 第7番 イ長調 作品92 から

ベートーヴェン：歌劇「フィデリオ」から「おお、なんと自由のうれしさ」

ベートーヴェン：交響曲第9番 ニ短調 作品125 「合唱つき」から

○気づいた点

第2回ではベートーヴェンの生涯を追うようなプログラムとなっている。これらのベートーヴェンの交響曲は、オーケストラのいわゆるメインとなる曲がほとんどであり、演奏会でプログラムされるのは1曲である。このような大曲を抜粋であろうとも、複数曲を聴ける演奏会は大変珍しい。またオーケストラの唯一のオペラ《フィデリオ》を入れることで、《ベートーヴェン交響曲第9番》において合唱が導入されたベートーヴェンの作品が理解しやすいだろう。また古典派音楽からロマン派音楽の先駆とされるベートーヴェンの音楽の、大きな時代の移り変わりにも耳を傾けることができる。

(3) 第3回 チャイコフスキー・アンド・ヒズ・フレンズ

○内容

チャイコフスキー：序曲「1812年」作品49からエンディング

プロコフィエフ：組曲「キージェ中尉」から第4曲「トロイカ」

ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲「展覧会の絵」から

第9曲「バーバ・ヤガーの小屋」 第10曲「キエフ（キーウ）の大きな門」

チャイコフスキー：バレエ組曲「眠りの森の美女」から「ワルツ」

チャイコフスキー&エリントン：バレエ組曲「くるみ割り人形」スペシャル

○気づいた点

このプログラムは、「チャイコフスキー・アンド・ヒズ・フレンズ」となっており、ロシアの作曲家に焦点を当てたものだろう。ロシアの同じ作曲家といえ、西洋のクラシックの系譜にあるチャイコフスキーと自国の音楽の創造しようとした他の作曲家との違いを鑑賞できる。

(4) パノラマとラボラトリー

1. ウェルカムミュージック（公演前の場づくり）
2. リズムあそび（簡単～高度）
3. アニメメドレー《アイドル》・《紅蓮華》・《新時代》／演奏形態・楽器&歌
4. パノラマとラボラトリー作曲《AM.9時 白い

朝》／演奏形態・楽器&歌

5. 即興デモンストレーション
6. 「特別支援学校校歌」アレンジ／演奏形態・楽器&歌
7. クリスマスメドレー《We wish a merry Christmas》・《ジングルベル》・《赤鼻のトナカイ》／演奏形態・楽器&合唱
8. 荒井由実作曲《やさしさに包まれたなら》／演奏形態・楽器&合唱

○気づいた点

最初にウェルカムミュージックをしていることで、演奏会に対する壁をなくしている。そして、リズム遊びや即興デモンストレーションなど、子どもと参加することを中心にしたプログラムにしている。

ウェルカムミュージックをすることで、

(1)「パノラマとラボラトリー」にインタビューした内容について。

○坪井さんのルーツ

坪井「僕、童謡大好きだったという風に思って、童謡を演奏する場所を探してたら子どもたちのところに演奏するっていうのが最初のきっかけですね。」

坪井「僕、童謡大好きだったという風に思って、童謡を演奏する場所を探してたら子どもたちのところに演奏するっていうのが最初のきっかけですね。」

・童謡がルーツにあり、それを子どもに演奏したいというのが契機である。

○演奏する上で子どもに気をつけていること

森田「もう子供だからといって容赦はしないっていうのは一番心がけてきます。」

坪井「子供と違ってすごい素直だからなんかこっちが楽しんでないとわかっちゃうからこっちがもう思いつきで全力で楽しんだらもうそれをわかって一緒に楽しんでくれるからもう一番私が子供たちよりも楽しむぞみたいな気持ちでやってます。」

・子ども相手だからと、手を抜いたりしない。全力でした方が子どもも全力で楽しんでくれる。

○嬉しかったこと

「意思疎通こちらの意思が無効に伝わっているのか向こうの意思をこちらはちゃんと受け取れているのかちょっとわからないような方々も多かったりとかするようなえっと病棟で演奏したんです。」

「娘さんとえっと一緒に手を握ってこう一時間ですよねやっぱライブやったこの一時間ゆっくりする時間を久しぶりに持てました」

「この演奏会っていう場があることによって自分の娘とようやく久しぶりにゆっくりする時間を過ごせたって、ええ教えてくれたんですよ。」

・演奏会を開催することで、音楽を伝えるだけでなく、音楽を“一緒に聴く”ことができる空間を提供する。

○障害を持っている子どもへの演奏会で、気をつけていること

「光の時のとかに、てんかんをお持ちのお子さんはいらっしゃらないかなっていうようなことで笹井先生に途中で確認して、あの点滅とかそういうふうなものそういうような物理的なものもあるし、やっぱ音的にえっと結構その音量の面とかいうふうなのだったり、あとは暗くて怖いとかそういうふうなものっていうのとかを気をつけたりとかはもちろんします」

・大きな音であったり、光によるてんかんや暗くて怖いということを考慮している。

「ウェルカムでやったあの空間っていう風なのは要するに、もちろんここに現実世界じゃないような雰囲気っていう風なのを作り出すっていうのはもちろんそうなんですけど、僕はここ楽器持って回ったりとか話しかけたりとかしてたのは一つはそのコミュニケーションをとってこの気持ちをほぐしていくっていうようなこともありますけれど、あとは音にだんだんこう慣れていってそしたらあ今日はスピーカーから音が出るんだ、このくらいの音量が出るんだっていうようなことだんだん慣れてきますね。そうすると結構入りやすかったりとかするんで、ですのでああいうふうな場を作ったりとかしたりとかして

るんです。」

・演奏会を開催するつなぎとして、ウェルカムミュージックをされている。これにより、演奏会の雰囲気と音や光に慣れることができる。

「表現がこっちが受け取りにくいんですよ。無反応なのかなっていうふうにも思います、それ心超折れそうになりますよね。あのプラス、さっきのてんかんのことだったりとか大きな音を途中で出したりとかしたら、えっとびっくりさせてしまって悪いんじゃないのかをえっと派手に演奏したりとかしたらうるさいんじゃないのかなとか今心配があるんでより一層自分の演奏が縮こまりそうになっちゃうんですよ、でも折れちゃダメですよって言うんだらう超気をつけてますね」

・演奏に対して無反応であることもあるが、それに対して演奏を消極的にしてはいけない。

○前向きに

「この場を作っていくのは僕でしょう、僕たちだよって発信者あの僕たちだよってっていうふうなこと。だから相手の反応で結構そういうふうな気持ちになっちゃったりとかすることあるけど、オリジンに、とにかく前向きに自分でやっていくんだっていう風なことはかなり気をつけてるかもしれない。」

・その演奏会を作っているのは自分ということを意識して、司会や雰囲気づくりに前向きにしていけないといけない。

○どうしたら元気になるのか

自分の目的があればうん何したいのっていうふうなことですよ。

鈴木：なるほどそう目的がまあしっかりしてたこそこの元気というか想像を引きつける

坪井：どういう話したい明るい楽しい場にしたいから自分が明かかれなくなった方がいいのかもしれない

・観客を惹きつけるように明るく振る舞うためには、目標をしっかり持つことが重要である。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. 子どものための演奏会を鑑賞して気づいた点

(1) まとめ

ある観点を持ってプログラムを組んでいるという共通点を持っている。第1回は「編曲」を、第2回はベートーヴェンという特定の人物に着目している、第3回はロシアという国に着目している。プログラム全体を通して、一つの観点を持つことで興味深く分かりやすい。

(2) 今後の展望

子どものための演奏会は、満席などもあり、あまり数が多く鑑賞できなかったことができなかった。もう少し多くの演奏会を鑑賞し、プロがどのように伝えようとしているかを確認したい。そしてクラシックだけではなく、日本の伝統的な音楽なども鑑賞して、音楽教育につなげたい。

2. 「パノラマとラボラトリー」のインタビューから

(1) まとめ

演奏会を開催・実施する時の意識と、障害児に対しての配慮が考えられる。演奏会を開催・実施する際には、その演奏会をつくっているのは自分たちであるという意識と、子ども相手だからと手を抜いたりしないことが重要である。また、演奏会を開催することで、音楽を伝えるだけでなく、音楽と一緒に聴

くことができる空間を提供することも意識しなければならない。障害児に対しての配慮としては、演奏会をする前にウェルカムミュージックを行い、演奏会の雰囲気やそこで流れる音や光に慣れることができる。大きな音や暗い会場が怖かったり、光によるてんかんに対して配慮をしている。

(2) 今後の展望

演奏会における考え方や、注意すべきことなどを知ることができたので、これから演奏会を企画する時などに活かしていきたい。特に考え方の点では、これから音楽教育をする上でも必要になることが多いと感じ、共有していきたいと考えた。

<参考・引用文献>

参考・引用文献など

BIOGRAPHY | pano.lab (pano-lab.com)